

松尾芭蕉 が求めた世界



俳聖・松尾芭蕉は道元禅を深く学んだ求道者でもあった。厳しい漂泊の旅の中で、歴史に残る多くの秀句を詠み続けた芭蕉が求めた世界とはどのようなものだったのか。禅の教えに造詣が深い東洋思想家の境野勝悟氏にお話しいただいた。

松尾芭蕉

まつお、ばしやう——寛永21(1644)〜元禄7(1694)年。名は宗房。芭蕉は俳号。伊賀の生まれ。藤堂良忠に俳諧を学び、京都で北村季吟に師事。後に江戸・深川の芭蕉庵に住み、蕉風と呼ばれる俳風を確立。各地を旅して多くの句や紀行文を残し、旅先の大坂で病没。紀行に『野ざらし紀行』『笈の小文』『更科紀行』『おくのほそ道』、日記に『嵯峨日記』などがある。

東洋思想家 境野勝悟



さかいの・かつのり——昭和7年神奈川県生まれ。早稲田大学教育学部卒業後、私立栄光学園で18年間教鞭を執る。48年退職。こころの塾「道塾」開設。駒澤大学大学院禅学特殊研究博士課程修了。著書に『日本のこころの教育』『方丈記 徒然草に学ぶ人間学』(共に致知出版社)『芭蕉のことば100選』『超訳法華経』(共に三笠書房)など多数。

世間から見捨てられたものに
価値を見出す

確か大学三年生の時だったと思
います。一つ上の先輩から「これ
を読めよ」と勧められたのが鈴木
大拙先生の『禅と日本文化』とい
う本でした。私が禅の教えに触れ
たのはこれが最初でしたが、禅が
茶道や俳句など幅広い日本文化に
も影響を与えたことに興味を覚え
ながら読み進めると、そこには少
年の頃から慣れ親しんだ芭蕉の句
が紹介されていました。

古池や蛙飛びこむ水のおと

山の中の静かな古池に蛙が飛び
込んだ。ポチャンという音が静寂
を破り、しばらくするとさらなる
静寂が広がった。それまでの私は
この句をそう解釈していました。
ところが、大拙先生の解説はそれ
とは全く違っていたのです。大拙
先生は古池を永遠なる自然の生命
の象徴と捉えられました。そして
蛙が飛び込むポチャンという音は、
永遠の生命から比べれば一瞬に過
ぎない人間の一生。つまり、一瞬
に過ぎない二度とない人生の時間

を嘆き悲しみながら過ごすことの虚しさ……。逆に生を惜しみ感謝しながら生きることの大切さを説いたのがこの句だといふのです。

数多い動物の中で私たち人間だけが花を愛で、音楽を聴き、小説を読み、新幹線や飛行機で旅をして人生を謳歌する喜びを知っています。そういう人間の素晴らしい働きを、なげもつと生かして人生を意義あるものにしなさいのか。自分にとって大切なものは、いまこうして生きていくということではないのか。これが芭蕉の根底にある考えです。その人生観を知った時、私はとても驚き、心が震えました。坐禅に取り組んでみようと思ったのは、実はこの時が最初でした。

あまり知られていないことですが、芭蕉は鎌倉時代の禅僧で曹洞宗を開いた道元禅師（一二〇〇～一二五三）の思想的影響を受けた俳聖です。芭蕉は伊賀（現在の三重県）に生まれ、三十七歳の時に江戸に出て深川に芭蕉庵という庵を結びます。その頃、広く世にその名を知られていた名僧・仏頂和尚に禅の知恵や生き方を学ぶためでした。先ほどの「古池や……」は、芭蕉が大きな悟りを得た頃の

句で、人生の捉え方が大きく変わったことがよく分かります。大悟した芭蕉が、その時に「私が大事にする風雅とはこういうものだ」と述べて綴ったのが次の句です。

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

カラスについて、皆さんはどのようなイメージを抱かれるでしょうか？ 自身の美意識の中にカラスが存在しているという人は多くないはずですが、それまでの詩歌の世界でウグイスやホトトギスをうたう人はいても、カラスを題材にした人はまずいませんでした。しかし、芭蕉は枯れ枝にカラスが止まっている背後に、極楽浄土を思わせるような真っ赤に燃える秋の夕景を重ねることで、金屏風に描かれた墨絵を彷彿とさせる美しさを見事に発見したのです。

つまり、芭蕉は皆が嫌って価値を認めない、見捨てられた生存の中に美を見つけ出したのです。新しい価値を見出すことのできる達人という言い方もできるでしょう。現代人の多くは、世間的な価値観の中で生きています。時には自

分の考えを曲げてでも世間的な価値観に合わせて生きようとしています。高等教育を受け自立した生活を送りながらも、なお本当に自分がやりたいことは何か、何が価値あることなのかを考えないまま生きていく人が多くいます。

もちろん、世間の価値観で生きることには悪いことはありません。しかし、いざ世間の価値観と合わなくなった時、自分が果たしてどう生きるかを考えておくことも大事ではないかと私は思います。

芭蕉は世間が見捨てたものの中に価値を見出しました。自身も武士という生き方を捨てて、四十一歳から五十一歳までは各地を漂泊して旅し、多くの句や紀行文を残しました。私は「枯枝に……」の句に触れる時、「俺の生き方だってそうなんだぞ。自分の価値観で力強く生きていくぞ」という芭蕉の誇り高き声が聞こえてくるのを感じます。

ぎりぎりのところで人生を生きていた芭蕉

『おくのほそ道』には、芭蕉がこれぞ『おくのほそ道』での最高の句だと大切にしていた句がありま

す。

芭蕉は岩手の里（現・宮城県岩出山）に宿泊した後、山越えをして出羽の国（現・山形県）に入ろうとします。しかし、尿前の関に差し掛かった時、「この険しい山道を通る者はまずいない」と関守に怪しまれて、なかなか通してはもらえませんでした。何とか出羽の国に入れたものの、日はすっかり暮れていました。ようやく山中の封人（国境を守る役人）の家を見つけ、泊めてもらうことになりましたが、大嵐で三日間、外に出ることができません。この時に芭蕉が詠んだのがその句です。

蚤虱馬の尿する枕もと

芭蕉は土間に敷かれた藁の上に寝ていたのでしょうか。ノミやシラミに血を吸われ、それは大変な痒みだったはずですが、しかも、枕元にいた馬が勢いよく小便をするので、その飛沫が顔にかかる。家を出ようにも嵐のために、そこに留まるほかない。このような、およそ風雅とはほど遠い状況にあって、芭蕉はこの句を詠みました。この句は、芭蕉のわび・さびの会

東本願寺難波別院(南御堂)の境内にある芭蕉の病中の吟
「旅に病んでゆめは枯野をかけまはる」の碑(大阪府大阪市) ©時事



心の作とまでいわれているのです。芭蕉は、そういう劣悪な環境の中に身を置きながらも、この時、俺は死なずにこうして生きています、という強烈な生の実感を得ていたのではないのでしょうか。もし、封人の家に泊めてもらえなかったとしたら、嵐の中で淋しく死んでいたかもしれない。そのことに深い感謝と感動の念を抱いていたとしても不思議ではないのです。

考えてみれば、芭蕉が生きてきた頃の旅は、常に死と隣り合わせでした。医者はいない、車も旅館もないという悪条件で何日も山越えをしなくてはいけない時もあったことでしょう。それでも芭蕉はそういう旅の生活を「風雅の誠」と呼んで楽しんでいました。その突き抜けた心境の高さには、ただただ驚くばかりです。

真実をありのままに見つめる

当時、旅人は皆早起きでした。暗いうちに出発しないと、予定の時刻までに目的地に辿り着けなかったからです。一宿一飯という言葉の如く、一日に口にするのは晩

ご飯だけ、朝食と昼食は摂らないのが当時の旅の常識でした。寒風が吹く二月の頃、芭蕉も早朝に宿を出発し、真つ暗な山道を歩いていました。すると、そこにほんのり漂ってくるものがあります。梅の香りでした。

むめが、にのつと日の出る山路かな

真つ暗な山道に漂う梅の香り、その時、そこにサーッと昇ってくる太陽。ふと見渡すと、輝く朝日の中に一面梅の花が咲いている。何とも幻想的だまばゆい光景です。芭蕉は「山路」を歩いていたらこそ、この光景を躍動感のある俳句として詠むことができました。

芭蕉はここでも、誰も価値を見出さない不便で狭隘な山道に新しい価値を見出しているわけです。

私はこの句を読む時、『法華経』にある「日月燈明」という言葉を思い出します。私たちは光がなければ、生きていくことができせん。しかし、その大切な光をともすれば忘れてしまいがちです。人生で大切なことは成功すること、そのためには常に考え続けなくてはいけない、考えていないと競争

に負けてしまふ、負けたら生きていけないと「頭の世界」にばかりに縛られているからです。

いくら頭で考えても、太陽が放つ明るい光なしに私たちは生きられません。「のつと日の出る」太陽の光があるからこそ、生きていく。これは宗教的な概念でも何でもなく、疑いようのない真実です。大切なのはその大きな自然の真実をありのままに認めることです。

人間の価値観を狭み込むと、真実は見えなくなってしまう。手前味噌な価値観を手放し、ありのままの大自然の真実を目にする時、心の奥底から「生かされてあげたい」という思いが湧き起こってきます。その幸福感は自ら全力を振り絞って手に入れるものではなく、もともと自分に与えられているものです。

幸福を外へ外へと求めるのではなく、自分の中にある太陽の光と同じ自然の働きを十二分に働かせることができたなら、素晴らしい人生を送れる。禅の修行者でもあった芭蕉が説こうとした世界は、自然と一体の世界です。このように芭蕉の句を禅という視点で捉えるのと、写生的な文芸作品として捉

えるのとは味わいや解釈も大きく違ってきます。それがまた面白いところなのですが、もちろん、これはどちらが正しくて、どちらが間違っているという話では全くありません。

また、芭蕉には、思いやりに溢れた句が多くあります。これも大きな特徴と言えるでしょう。

よくみれば薺花さく垣ねかな

ナズナとは、世間の人が誰も注目しないペンペン草です。芭蕉がふと目にした垣根にこのナズナを発見し、その小さな花を心から慈しんでいることが「よく見れば」という言葉から伝わってきます。

実際、ナズナを拡大鏡で見ると、その紫の花弁は他の花では比較にならないほど美しいものです。

もう一句、これもよくご存じかと思えます。

荒海や佐渡によこたふ天河

日本海に浮かぶ新潟の佐渡島は風光明媚な観光名所ですが、当時は流刑地として人々から恐れられていました。金山の採掘という重

労働で一生を終えた人たちが数多くいる血と涙の島です。本来罪人とは無縁な日蓮も親鸞も誤解や迫害によって佐渡島に流罪になっていきます。

「荒海や」という言葉は罪人たちの悲しい人生を象徴しています。

しかし、その上に広がるのは美しい天の川です。これがどれだけ大きな救いでしょうか。苦しみや悲しみの多い人生、それでもなお大自然から生かされていることへの

実感が込み上げてくる句です。罪人たちを慈しみの目で見つめる芭蕉の思いを、そこに感じ取るのは私だけではないはずです。

生きている限り 夢を追い求める

芭蕉は四十一歳で「野ざらし紀行」の旅に立出し、五十一歳の時に旅先の大坂で没しました。亡くなる前、「あなたの辞世の句は何ですか」と聞かれた芭蕉が「昨日の発句は今日の辞世、今日の発句は明日の辞世」と答えたのは有名な逸話です。芭蕉が作句にどれだけ深い思いを込めてきたかがよく分かりますが、それでもどうしてもと弟子たちに懇願されて詠んだ辞

世の一句があります。

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

枯れ野には、句の題材になるような花は咲いていません。しかし、夢さえあれば枯れ野を自由に駆け巡ることができると芭蕉は言うのです。芭蕉の生き方は、その夢の景色を命ある限り追い求めるものでした。

『おくのほそ道』の冒頭部分が思ひ起こされます。

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予も、いづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまらず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、や、年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関越えんと、そまろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず、も、引の破れをつり、笠の緒付けかえて……

未だ行ったことのない地を旅するという「夢」に向かつて胸を弾ませている様子がありありと伝わってきます。抑え難い夢に促されるようにして江戸・深川を立出し、芭蕉は、栃木を経て「白河の関」を夢に、「松島」に憧れて歩を進めたのです。そして、臨終の場にあっても、なお夢に向かって一歩を踏み出そうとしているのです。その芭蕉の姿は私にはとても格好よく思え、まさに人生のよきお手本となっています。

私は今年で米寿を迎えます。いつまで生かしていただけのかは分かりませんが、いまでも夢は持ち続けています。長い間、禅をはじめとする東洋思想を学び、人にも説いてはきましたが、まだまだ私は偽物です。もっと腰を据えて本物になる努力をしなくてはいいけない。これがいまの切実なる思いであり夢です。

「造化に帰れ」……。本当の意味で大自然と一つに結ばれていないければ、人間は本物ではありませんから、私も命ある限り、さらに大自然と語り合いながら、芭蕉のように大自然と一体となる心境で生きられたらいいなと思っています。